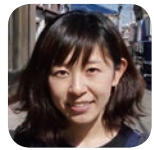


4 二拠点居住で見つけた「小さくて豊かな暮らし」



印部 里菜子
INBE Rinako

イラストレーター / デザイナー

最近、都会と田舎での2拠点生活をする人が増加傾向にある。神奈川県三浦市で小屋づくりを行った彼女も、平日は東京のアパート、週末は三浦の小屋という2拠点生活を送っている。2拠点生活を送ることで、得たものは一体何だったのだろうか。

週末は三浦の小屋

私たち家族は、平日は東京のアパート、週末は神奈川県三浦市の小屋という二拠点居住をしています。東京のアパートから小屋までは、電車とバスで1時間半、車だと1時間ほど。三浦は、趣ある港町や一面に広がる畑、海や森などの自然に恵まれていて、都心に近いとは思えないほどなんともどこかところずです。

夫婦ふたりで週末を過ごすために作った小屋は、広さ約11m²。屋内は半分が土間で、小さな台所とトイレ・シャワーがあります。残り半分が床張りのスペースで、寝るのはロフトです。必要な部分にはプロの手を借りる



写真1 三浦三崎の城ヶ島大橋

「ハーブビルド」という方法で、週末に通って1年ほどかけて自分たちの手で作りました。

小屋を作り始めた時には想定していませんでしたが、現在は、私は会社勤めを辞め、昨年生まれた子どもとともに3人で東京と三浦を行き来しています。

動機は「したい暮らしをしたい」

実は、はじめから小屋や二拠点居住を考えていたわけではありません。上京して数年経ち30代を迎えると、周りではちらほらとマイホームが話題にのぼり、私たちも今後の住まいについて考えるようになりました。けれど、友人たちのようにローンを組んで家を建てたりマンションを買ったりすることには、あまり心惹かれませんでした。

二人でとりとめなく話す中で、「とにかく楽しく暮らしたい」「自分たちがしたい暮らしをしたい」というシンプルな想いが共通していることに気がつきました。そして「自然があるのどかな場所で、こじんまりした居心地のよい空間を、できれば自分たちの手で作りたい」という想いから、都内に通勤できる場所でリノベーションできる中古住宅を探し始めました。

週末になると民泊を利用して色々なまちに滞在し、暮らしをイメージしながら物件を探しました。けれど不動産屋で見つかる物件は、小さくても40m²前後と私たちには大きすぎるものばかり。また、気に入ったまちに一週間滞在して実際に都内に通勤してみたところ、平日にまちを楽しむ余裕がないことに気がつきました。「それなら、気に入った場所に週末暮らすための小屋を作ろう」という結論に至り、三浦で土地を見つけて小屋を作



写真2 一面に広がるキャベツ畑



写真3 私たちの小屋

り始めたのです。

人の縁に助けられた小屋づくり

小屋といっても建築確認申請が必要だったこと、ずっと暮らすためにある程度しっかり作りたかったことから、基礎と構造、防水や設備にかかわる部分は工務店さんをお願いしました。引き渡しを受けた後、屋根、下地、外壁、断熱材、内装などを1年ほどかけて作っていました。

私たち夫婦は大学で建築を学びましたが、DIYの経験はほとんどありませんでした。釘の選び方も道具の使い方も全くわかりません。そんな時、三浦で同世代の夫婦が古民家をリノベーションした宿づくりの手伝いを募集しており、技術を習得するために参加してみることにしました。

ところが、作業が楽しくて何度も通ううちに、経験や知識以上に知り合いの輪が広がっていったのです。大工さんや職人さん、DIYが好きな友人たち、三浦で知り合った多くの人が小屋作りを手伝ってくれました。作業中にも、通りがかりにいつも声をかけてくれる人、道具を貸してくれるご近所さんなど、知り合いが増えていきました。

夫婦ふたりで小屋を作るはずが、振り返るとたくさんの人に助けられていました。毎週末通ってゆっくり作ることで、二拠点居住をはじめる前から地域につながりを持つことができたのかもしれません。

小屋は特別な場所ではなく日常

小屋で寝泊まりできるようになってからは、よほどの予定がない限り週末は三浦で過ごしています。土曜の朝早く三浦へ行き、日曜の夜に東京へと戻ります。ただ、子どもが生後間もないうちは日帰りでした。「行き来が大変ではないか」と聞かれることもあります。私たちににとってはこれが日常で、二拠点あわせて一つの暮らしという感覚です。このことが、別荘との大きな違いかもしれない。主となる住まいを拠点とし、余暇を楽しむ特別な場所としての別荘とは異なり、二拠点居住はどちらにも日常の暮らしがあります。小屋は特別な場所ではなく、むしろ東京の住まいよりも日常そのものを楽しんでいると言えるかもしれません。

毎週末に三浦で何をしているのかと言うと、実は特にこれといったことはありません。近くの砂浜でぼんやりして、まちをぶらぶら歩いて、デッキでコーヒーを飲んで、三浦の食材でごはんを作るような一日。けれど何もないようでいて、一日の終わりには心が満たされています。また、近所の人が魚を持ってきてくれたり、収穫の手伝いをして野菜をいただいたり、行事に参加したり、人や地域とのつながりは三浦での暮らしを豊かにしてくれています。

二拠点居住や移住の場合、コミュニティへの溶け込み方が関心ごとになりますが、私たちの場合、あまり意気込んでコミュニティに加わる性格ではありませんでした。それでもこんなにも人の縁に恵まれたのは、三浦の

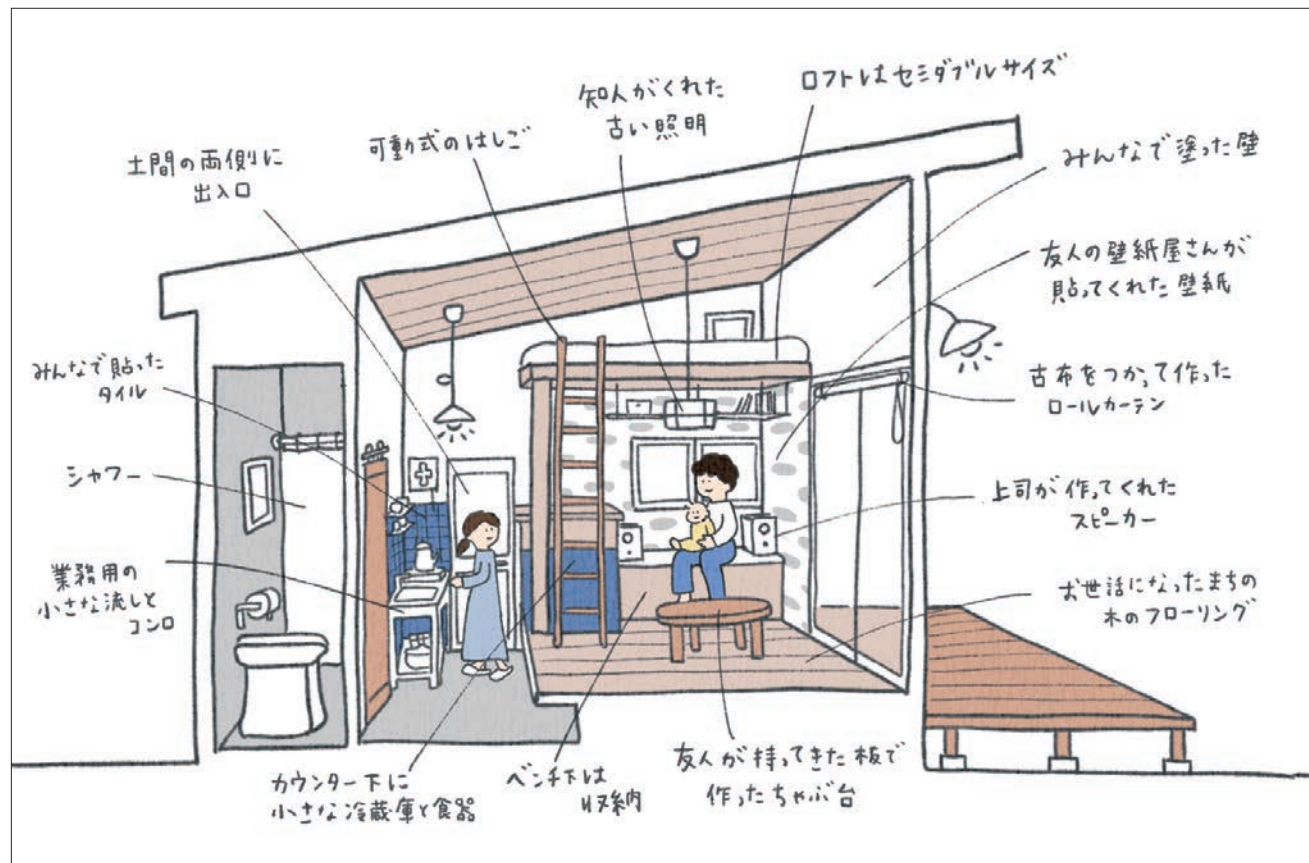


図1 手作り感満載の小屋

土地柄や人柄によるものだと思います。しいて言えば、楽しそうな場に足を運んでみたり、出会いを大切にしたり、自然体で三浦を楽しむ様子を周りの方々が受け止めてくれたのではないかと思います。

三浦を田舎と呼ぶかどうかは別としても、都会にはない居心地の良さを感じます。地方出身の私たちにとって、東京は人も場所も情報も多すぎて、どこか自分たちの手には負えないような感覚を抱くことがありました。対して三浦では、まちを歩いていれば必ず何人もの知り合いに会い、小屋にいと誰かが訪ねて来て、運転すれば裏道までわかり、行く場所はだいたい決まっています。その手に負えるスケール感とでもいうものが、田舎の居心地の良さなのではないかと思います。二拠点居住により、都会で仕事をしながらも自分たちが居心地良く感じる居場所を得ることができました。

二拠点居住ならではの不便も

私たちにとっては圧倒的にメリットのほうが多いのですが、二拠点居住ならではの不便を感じることもあります。

平日は小屋を不在にしているため、自然災害や防犯面での心配は拭えません。例えば台風や大雨などで小



写真4 キッチン周り

屋の様子が心配でも、平日はすぐに駆けつけることができず不安を抱えて過ごすことになります。予報がわかれば事前に養生などの対策をしますが、急な場合は友達や近所の方に電話で様子を教えてもらうこともあります。また別荘地でもない限り、平日不在の小屋の存在が近所の方に少なからず不安を与えることも考えられます。なるべくそのようなことを避けるために、小屋を作り始める際に一軒ずつ説明に回り、

平日の連絡先として携帯番号をお伝えしました。防犯面では草刈りや枝払いなどに気を配り、荒れた雰囲気を出さないようにしています。

生活面での不便はあまり感じませんが、ごみの収集日が平日なので小屋で出たごみは東京に持ち帰り、生ごみは手作りのコンポストで処理しています。また子どもが産まれたので、三浦にもかかりつけ医を持っておきたいと思っています。

金銭面での負担についても触れておかななくてはなりません。固定資産税、週末の交通費などのほかに、電気・ガス・水道などのライフラインは使用量が少なくても一定の基本料金がかかります。これらの出費をマイナスに捉えることもできますが、逆に都会での外食や休日のレジャー、交際費や衣服費などの出費は明らかに少なくなっています。二拠点居住というライフスタイルで得ているものを考えると、妥当な出費だと感じています。

三浦の暮らしで得られた価値観

小屋では慌ててものを揃えることはせずに、好きなものや必要なものを作ったりもらったりして、ゆっくりと暮らしはじめました。友達が持ってきた一枚板で作った小さなちゃぶ台、知人がくれた古い照明、アンティークの古布で作ったロールカーテン、ようやく見つけた壁紙。自分たちの心地よい空間は自分たちで作れることを実感し、古くて狭い東京のアパートも愛着をもって居心地よく住みこなすようになりました。

そしてもうひとつ、二拠点居住をはじめてから「こうでなければいけない、これしかない」という考えに縛られることがなくなりました。三浦で多くの経験をし、世代や職業を超えた出会いに恵まれ、自分の置かれている環境が全てではないと身をもって知ることによって得られ



写真5 一枚板で作ったちゃぶ台

写真6 手作りのコンポスト

た感覚かもしれません。

三浦での暮らしで得られた価値観が、平日の東京での暮らしも豊かなものになりました。実際の二拠点居住は、イメージされがちな「都会のストレスを田舎で癒す」構図ではありません。どちらの拠点も、平日も週末も、自分のものにすれば良いと思うのです。

暮らし方はもっと自由に

昨今のコロナ禍による社会への影響は計り知れませんが、同時に、これまでよりも人々の暮らし方が少しだけ自由になるのではないかと想像しています。リモートワークの普及や、自分や家族の気持ちと向き合う時間の増加により、「したい」と思った暮らしを「ちょっとやってみよう」と思える環境になるのではないのでしょうか。

本当にしたい暮らしは、「賃貸か持ち家か」「都心のマンションか郊外の戸建てか」といった二択の中にはないかもしれません。私たちのような二拠点居住や小屋暮らしだけでなく、他拠点居住や移住、ミニマルライフ（暮らしの質は最大限にしてモノは最小限にする）やオフグリッド（自分で電気をまかなう）などのライフスタイル、リノベーションやコミュニティビルドなどそのプロセスも含めて、暮らし方の選択肢が広がっています。地方や都市が抱える課題も、空き家問題も、したい暮らしを楽しむ人が増えていくことで少しずつほぐすことができるかもしれません。

二拠点居住の目的やこれからの計画を尋ねられることもあるのですが、暮らしに目的も計画も特に必要ないのではないかと思います。難しいことを考えず、「楽しそう」「してみたい」という気持ちに目を向けて一歩踏み出してみることで、想像もしなかった豊かさが得られるかもしれません。